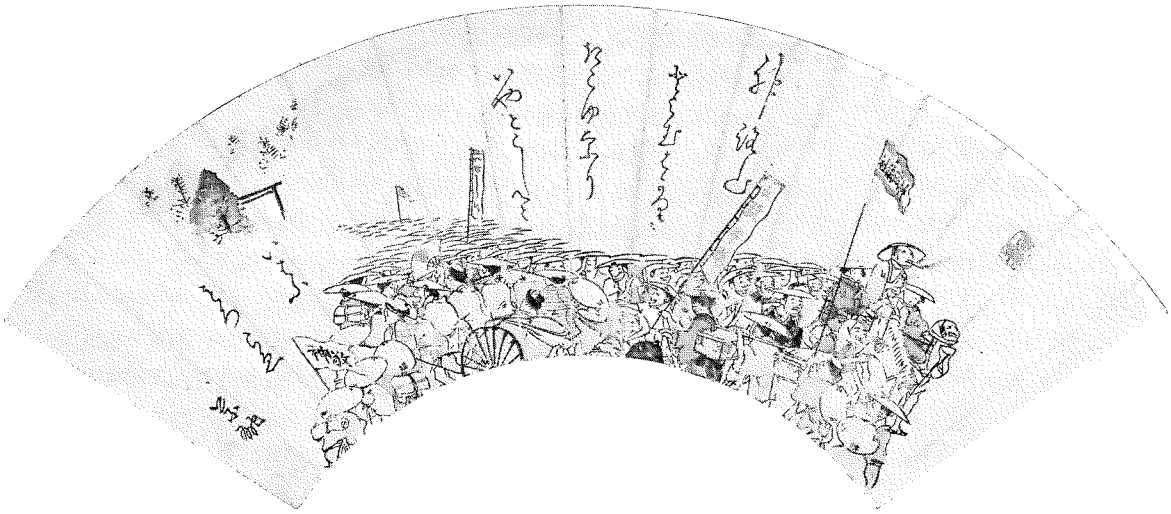
はくぶつかん　プラネタリウム　古民家園

あるむぜお

府中市郷土の森だより　No.15　al museo



御蔭参扇面（神宮徴古館農業館蔵）

特別展

伊勢へ奈良へ

幕末の旅と社会

3月24日（日）～5月6日（祝）

六所宮神主の猿渡盛章の『山海日記』をはじめ、江戸時代後半の府中とその周辺の人々の伊勢・奈良方面への道中日記・紀行文を通して、激動の時代を探ってみます。

江戸時代しばしば「おかげまいり」が流行し、数百万人に及ぶ人々が伊勢神宮参詣に押しかけました。この資料には「神路山とよむはかりにきこゆなり　いやとこしへといはふもろこゑ」の歌が書いてあります。神路山は神宮（内宮）裏山一体。

伊勢神宮の御師のはなし

小野一之

江戸時代には、たくさんの人々が伊勢神宮への旅に出かけました。その多くは庶民で、信仰と物見遊山が半分ずつくらいの気分でした。遠くの関東からはもちろん、東北の果てからも伊勢をめざして旅立っています。

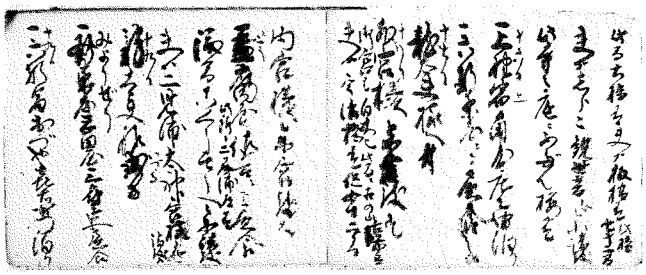
伊勢神宮は奈良時代、天皇家の祖先神天照大神を祀る神社として、庶民の参拝を禁止していましたから、こんなにもてはやされるようになったのはさほど古いことではありません。室町時代の頃より次第に神宮への信仰が広がって行き、江戸時代を通じて広く浸透したといわれます。小稿でとりあげるのは、こうした伊勢神宮への信仰を導いてきた御　師といわれる人たちのことです。

まず、いまある府中の人が遺した幕末の頃の伊勢参宮道中日記をめくってみます。嘉永３(1850)年の正月４日に旅立った上染屋村（府中市白糸台）の村野蓑右衛門の日記には、２週間後に伊勢にたどりついたところで、「十七日十八日、泊り　伊勢龍太夫」とメモされています。安政４（1857）年正月５日に出発した人見村（府中市若松町）の田中某も、「十七日、龍太夫様へ付」「十九日、龍太夫様出る」と書いており、その間の18日には伊勢神宮（外宮と内宮ほか）や二見浦、朝熊山に出かけています。２人とも、伊勢に着くと「龍太夫」のところで２泊をし、その間に参宮をすましていることがわかります。

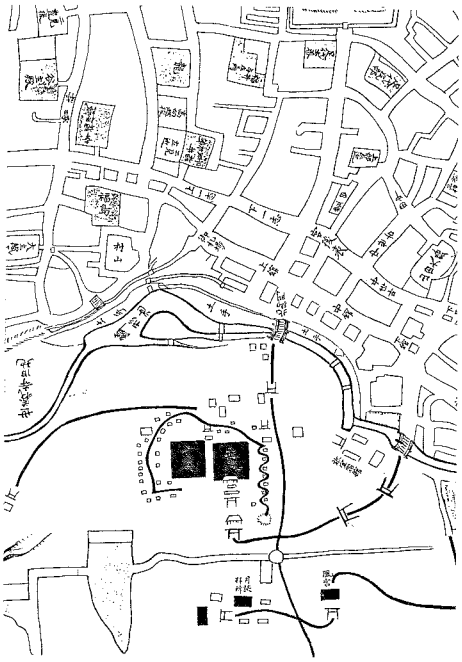
安政５（1858）年の番場宿（府中市宮西町）の伊勢講、高橋仁左衛門の道中日記には、このあたりのことがもっと詳しく書いてあります。正月５日に府中を立ってから19日め、伊勢に近い松坂まで来た晩のこと、「松坂町米屋甚右衛門方江泊り、龍太夫様御手代被参、酒肴被出地走二相成」。つまり、龍太夫の手代が松坂の宿まで出迎え、そこでご馳走してくれたというのです。以下、日記のメモを追っていくと、①途中の茶店でも龍太夫の手代に酒や菓子が出された。②龍太夫の屋敷に泊まる間、たいへんな馳走になり、「龍太夫様自身被出叮寧之挨拶等有之」。③外宮・内宮のほか伊勢の周辺を案内された。しかも「手代衆三人終日附添被居、諸事心附至而叮寧也」。④龍太夫の屋敷で大々神楽を奉納した。などのことがわかります。結局、龍太夫方に５泊し、「当日朝種々地走出、三ツ時頃与支度して夫々暇乞いたし出立、御師手代衆宮川迄送り被参暇乞いたし」たということです。もっとも、このような歓待に対して、高橋ら講の人たちは、「太々神楽料」「諸祝儀」という形で、それなりの金額（「〆金三拾五両弐朱」）を龍太夫に包んでいます。

実は、この龍太夫という人物が伊勢神宮（外宮）の御師なのです。府中のほか、武蔵の多摩地方に遺る多くの道中日記のなかにも龍太夫の名が見られます。別の史料によれば、龍太夫は幕末までの間に武蔵南部と下総（千葉県西部）を中心に、3,000か村に及ぶ地域に壇家を持つ有力な御師であったことがわかります。(もっとも、八王子は外宮御師久保倉太夫の壇家であったし、府中でも小野宮(住吉町）の内藤重鎮や重英の紀行文を見ると、内宮御師孫福館太夫の名が見えます。壇家の分布は多少入りくんでいたのでしょう。)

伊勢の外宮と内宮のまわりにそれぞれ屋敷を構える御師の数は数百人に及び、各自が全国に壇家のなわばりを持



田中氏　道中日記帳(田中善太氏蔵)より



伊勢神宮（外宮）と御師の屋敷
（伊勢市教育委員会刊天保五年山田町方之図より）

っていました。御師は壇家が参宮するときに、これを屋敷に迎えもてなしをしました。一方、御師とその手代は毎年各地の壇家をめぐり、神宮の御札や伊勢暦を配り、壇家からは初穂料をもらい受けていました。御師はふだんから伊勢神宮のありがたさを人々に説いてまわり、参宮を勧めたのでしょう。江戸時代に伊勢参宮が大いに流行した背景には、こうした御師たちの活発な活動があったのです。

そもそも伊勢の御師は、神宮の下級の神官でした。時代が古代から中世へ移っていくなかで、財政的基盤を失いつつあった伊勢神宮の「経済」を受けもつ者として登場してきたのです。御師たちはまず新興の武士層の信仰を集めて神宮の荘園を各地に作り、次に有力農民らを介してごく一般の庶民にまで信仰を広めていきました。

しかし、御師は次第に神宮からも独立したような形で活動するようになります。参宮者を案内して神宮へ行くと、自分で持ってきた賽銭箱を前に置き、そこに銭を投げさせ、また箱を持ち帰るという御師の話が笑い話のように伝わっています。御師が壇家に配る御札も神宮と関係のないところで作られていた話などとともに、まるで神宮に寄生して商売でもしていたようにも見えてしまいます。しかしながら、中世以降の御師の活動が、神宮への信仰を日本中隅々まで広める役割を果たしたことは、けっして過少評価することはできないでしょう。

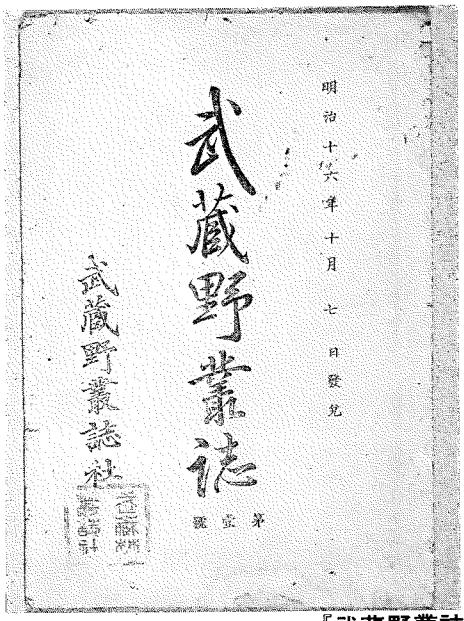
江戸時代を通じて盛んだった伊勢参宮は、しばしば「おかげまいり」という大流行を見せました。神宮の御札が天から降ってきた話をきっかけに、膨大な数の人々が集団で伊勢神宮に押しかけました。さらにこれは、明治維新前夜の「ええじゃないか」の運動に発展します。御札が降ってくることが実際にありえない以上、だれかがどこかで演出していたはずです。そこにも御師の姿が見え隠れしています。

さて、人々が「ええじゃないか」の狂喜・乱舞に興じている間に、時代は大きく展開し明治維新を迎えました。伊勢神宮は新政府の政策のもとで、今までの庶民の神さまから、国家の最高神へと大きく様変わりしました。神宮をここまで導いてきた御師の制度も、この間に全て廃止されました。

古代から近代に至る長い歴史のなかで、伊勢への信仰がどんな過程をたどり、どんな役割を社会に与えてきたのか、歴史はだれがどのように押し進めていくのか。そんな問いに答える大きなカギの１つが、御師とたくさんの人々との関係のなかにあると思われるのです。

御師龍太夫の屋敷跡
（伊勢市大世古）　現在は神宮と関係のある製紙工場となっています。

『武蔵野叢誌』



『武蔵野叢誌』

『武蔵野叢誌』は、明治16(1883)年10月、府中駅の成文社から発行された多摩地域における最初の本格的な雑誌であり、三多摩ジャーナリズムの魁といわれています。

発行元の成文社は、明治12年２月、府中駅の渡辺寿彦が始めた印刷所で、八王子の柴田印刷所とならび多摩印刷業界の草分け的な存在です。当時は印刷のほか、中央の各新聞の取次販売、そして出版活動も行っていました。

『武蔵野叢誌』は、比留間雄亮・本田定年・木村新之助の３人が発起人となり、西森武城を編集人として刊行されましたが、発起人の３人は当時いづれも北多摩郡役所の書記であり、西森もこの年その御用掛りとなっていました。

このように、『武蔵野叢誌』は、北多摩郡役所の書記グループが主体となり、友人知己の協力を得て発行したもので、多分に北多摩郡役所の機関誌的性格をもつ雑誌でありました。紙面に掲載された雑報記事(ニュース)を見ましても、全体で142件のうち、72%にあたる107件が三多摩の記事であり、そしてその３分の２が北多摩関係の記事となっています。

雑誌の内容構成は、何度か変遷をとげているものの、ほぼ論説・雑報・文芸・官令公報そして広告からなっており、内容的には当時の一流新聞と大差はありませんでした。ただ、漢詩文・和歌・俳句や、さらに狂詩・狂歌・狂句といった文芸欄の多いのが特色で、いわば新聞と文芸雑誌を折衷したような性格になっていました。

論説は、府中八幡宿の高汐豊三と小金井村の大久保常吉が中心であり、高汐は空論を避け実利を重視して官民の調和を唱えるイギリス流自由主義の立場をとり、一方大久保は国会開設を前にして民権陣営の結束と政治思想の培養の必要を強調しました。

しかし当時明治政府は、自由民権運動の高揚に対し、徹底的な言論・出版の取締りをもって臨んでおり、少しでも政府に批判的な新聞・雑誌はつぎつぎと弾圧をうけ、休刊・廃刊に追い込まれていきました。

『武蔵野叢誌』も創刊以来官憲のいわれなき弾圧に苦しみ、明治17年２月には、その第７号の附録が新聞紙条例に抵触するとして罰金を課され、編集人西森武城が責任をとって伊藤伊之助と交代しています。

そして第25号に至り、筆禍事件を起し廃刊に追込まれますが、その直接の原因となったのは、日野の佐藤俊宣の「日東家伝勅命丸」と題する戯文で、慶応４(1868)年の反官軍派による江戸市中の落書「苛法錦旗勅命丸」を若干手直ししたものといわれています。

この戯文により、持主兼発行人の渡辺寿彦、編集人の伊藤伊之助そして執筆者の佐藤俊宣の３人は皇室に対する不敬罪で処罰され、同誌は発行停止となったのです。

こうして、三多摩ジャーナリズムの魁として登場した『武蔵野叢誌』は、明治17年11月30日発行の第25号をもって廃刊となりました。創刊からわずか１年１か月という短命でした。　(E)

天体観測入門講座 その1

星空へのいざない

昔の人は、星空を見上げ農作物の収穫の時期や季節を知り、また、方角を知る手掛りとしました。星は生活に必要だったのです。しかし、現在の我々は、星を見なくてもカレンダーで日付を知り、しっかりした地図を見て、さらにコンパスで方角を知ることもできます。今や生活に星は、ほとんど必要なくなりました。だからといって人が星を見なくなったわけではありません。人が真理への探究心を持っている限り、星たちへの興味はなくならないでしょう。

＝星の世界＝

昼には太陽が、夜には月や多くの星たちが、輝いています。そして、我々は地球という一つの星の上で生活をしています。この地球を含めた星たちの世界を宇宙と呼んでいます。宇宙はどういった世界なのでしょうか。それでは、地球に一番近い順に紹介していきましょう。

地球に一番近い天体は月です。地球の周りをおよそ1か月かけて回っている月は、自ら輝いているわけではなく、太陽によって照らされているために、見ることができます。流れ星を見たことがありますか？　流れ星は、大気に物質の粒が突入し空気との摩擦によって発光するために見えるのです。夕方西の空に一際明るく輝く星を見たことのある人もいると思いますが、これは宵(よい)の明星、金星です。金星は太陽を回る星で、惑星(わくせい)の一つです。惑星は、太陽から、水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、冥王星(めいおうせい)、海王星の順に現在並んでいます。これら惑星の他に小惑星や、太陽にある程度近づくと、尻尾(しっぽ)をのばす彗星(すいせい)（ほうき星）などもあります。これらの星々をみんな含めて太陽系と呼んでいます。地上から見ると太陽系の星たちは星座を作る星と違い、星座の間を動いていきます。

星座を作る星たちは、常に明るさを変えないように見えるので、恒星(こうせい)と呼んでいます。望遠鏡を使うとさらに色々な天体を見ることができます。肉眼で見ると一つの星が、望遠鏡で見ると二つの星に見える二重星、数十個～数百個の星が集まった散開(さんかい)星団、数万～数十万個の星が集まった球状星団、あるいは巨大なガスの塊がそこで誕生した星によって照らされる散光星雲、星が一生を終え、周りに少しづつガスを噴出し、ドーナツなどの形に見える惑星状星雲など様々です。これらの天体は、夏によく見える天の川（銀河）の一部となっています。銀河は、1000億あるいは2000億もの恒星があると言われています。さらに、我々の銀河の外には、同じような銀河がたくさんあって、銀河団をつくっています。それを超える構造として、超銀河団が形成されているとも言われています。

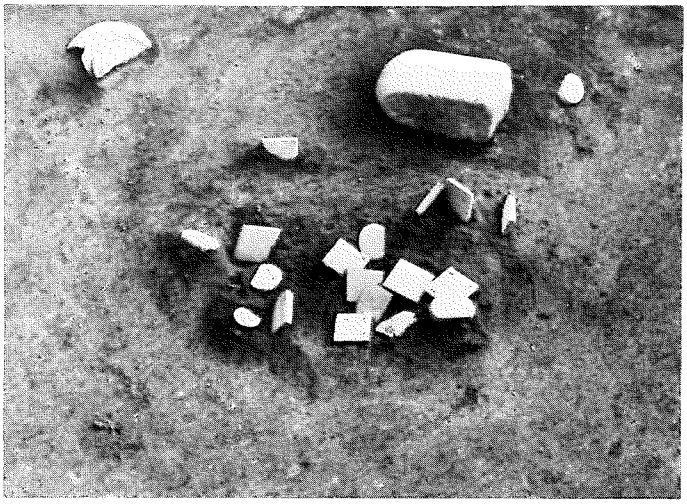
こういった宇宙の星々が我々を星空へと誘っているのです。

＝恵みの母「太陽」＝

地球上に様々な生命が誕生したのは、地球が太陽の周りを回る惑星で、絶え間なく降り注ぐ太陽光線があるためなのです。太陽は、地球にとって「恵みの星」なのです。

太陽は恒星の一つです。したがって、太陽を観測することで、遠くてあまり情報を得ることのできない他の恒星の様子も知ることができるのです。望遠鏡で見ると、常に変わりなく輝く太陽の表面に、黒い点があり、毎日観測していくとその位置や形を少しづつ変えることに気付くでしょう。この様子を観測するには、望遠鏡の他に、太陽投影盤、スケッチ用紙があれば誰にでもできることです。天体観測は、たくさんの種類の天体があるように、多くの方法があります。数ある天体観測の中から、次号より数回に分けて恵みの母である「太陽」の観測方法として、スケッチのとり方、その結果の整理方法などを紹介したいと思います。　（Ｈｏ）

＝最近の発掘調査から＝



石銙の出土状態

今回は、美好町１丁目で見つかった、石銙（せつか）という珍しい平安時代の遺物についてお話します。

この石銙というのは、官人などが着用を許された革帯（かわおび）に付く石製の飾りです。

革帯の使用は、『扶桑略記（ふそうりゃくき）』の慶雲４（707）年の条に「天下始用革帯」とあり、この時より開始したことがわかります。これより以後、革帯に付けられた飾りは金属製で、その多くは銅（銅銙（どうか））でした。その後、平安時代初頭に何度か法令が改められ、石銙が用いられるようになります。

こうした銅銙・石銙は、一般的な集落跡では少なく、都や府中のような国府跡で多く出土しています。しかし、遺跡から出土するのは、腐ることのない銅銙や石銙といった部品だけです。革帯の全容は、奈良の正倉院や広島の厳島（いつくしま）神社などの伝世品によって知ることができます。

さて、今回石銙が出土したのは、美好町１丁目の交差点より北西へ約200ｍのところです。調査区域内では、竪穴住居跡30軒、掘立柱建物跡４棟などが見つかっています。石銙は、そのうちの１軒の竪穴住居跡から、まとまって38個も出土しました。竪穴住居は特別なものではなく、むしろ小型のものでした。一緒に出土した土器から年代を考えると、９世紀後半～10世紀初頭のものとみてよいでしょう。

今までにも市内では比較的多くの銅銙・石銙がみつかっていますが、せいぜい１か所で１～２点出土するにすぎません。全国的にも、１か所からこれほど多量に出土したことはなく、大変珍しいことです。38個の石銙は、その寸法や石材の違いからいくつかに分類することができそうです。伝世品に付いた銅銙や石銙の数が12～13個であることからも、今回出土したものが数本分であることは確実です。調査当初には、石銙の製作場所ではないかと考えましたが、作る時に生じる屑（くず）や破片はありませんでした。さらに革帯に取り付けた時の銅の針金が残っていました。もしかすると、修理のために集められたものなのかも知れません。

さらに、今回もう一つ重要な発見がありました。38個のうち、２個の裏に「十」の墨書きが確認されたのです。石銙に墨書が確認されたのは、おそらく全国で初めてのことでしょう。しかし、この文字がいったい何を意味するのかは大きな問題です。

いずれにしても、１か所で多量の石銙が出土したことと、石銙に墨書が確認されたことは大変重要で、その意味は今後の検討課題です。

（都営府中美好町１丁目第７団地地区の調査から　和田）

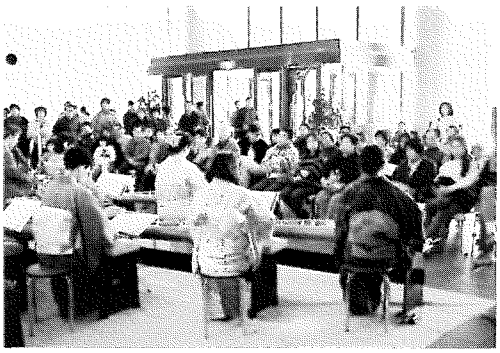
正倉院伝世の革帯（『正倉院宝物』より）

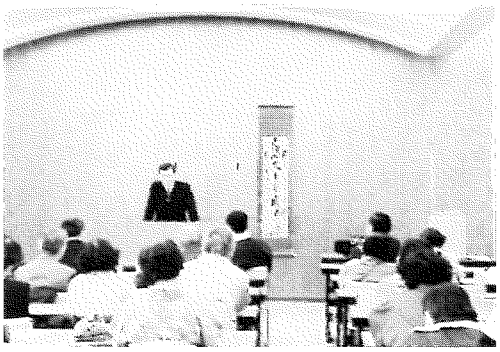
カメラアングル

第４回
「梅まつり」

2/10～3/10

春のプレリュード、「梅まつり」も早いもので４年目をむかえました。初日から訪れる人の数も上々で、郷土の森の観梅もかなり浸透してきたようです。
園内は野点のお茶を楽しむ人、館内は琴の演奏に聞き入る人でにぎわいました。





▲2/17　梅講座

企画展「天神さま　あ・ら・か・る・と」に伴い、今年の梅講座は天神信仰及び天神人形に関するテーマで行いました。

▶1/20　ワラ細工講座

昔の農家の土間でワラ細工実習。縄が編めて、鍋敷が作れたらまずは合格。

あれこれ

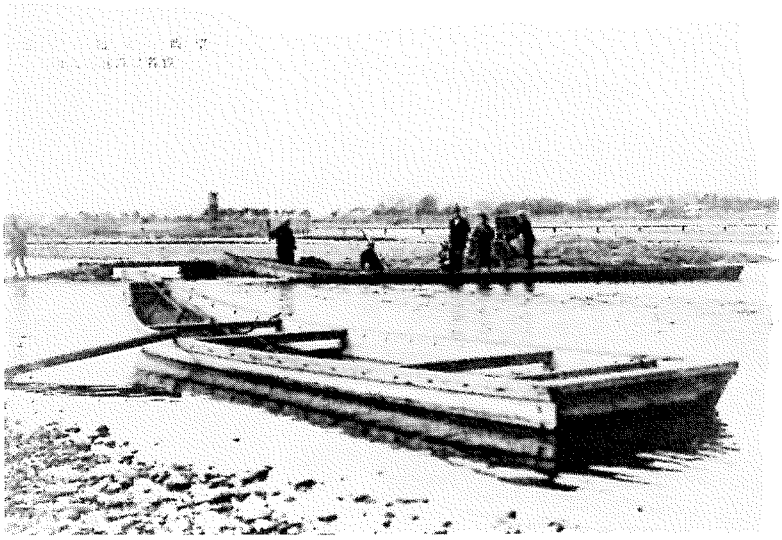
多摩川の渡し

府中の南を流れる多摩川には、長い間橋がありませんでした。鎌倉街道が多摩川を渡る関戸にも、はじめて人が通る常設の橋が架けられたのは、実に1937（昭和12）年になってからのことです。

写真は、府中市域にらか所ほどあった渡船場の１つ、是政の渡しの1929（昭和４）年頃の風景です。稲城の大丸から対岸の府中を望んでいます。渡船の出発を待つ、自転車に大きな竹籠を積んだ夫婦らしき男女と、天秤棒のようなものを担いだ男。左で振り向く男が舟夫でしょうか。ワイヤーを使った渡船のようです。遠くに仮橋が見えます。

地元の人々は普段の生活に渡船を使いました。冬の間、水量が少ない時は仮設の板橋も作りました。府中のハケ下に住む人々にとって、対岸の向山（多摩丘陵）の雑木林は、薪にするソダ、肥料にするクズ（枯葉）、道具を作る丸太、さらに屋根を葺くカヤなどを集めるための生活に欠かせない場所でした。

この年、立川・川崎間の南武鉄道が全面開通しています。稲城・川崎方面へ向かう道も新しく整備され、1941（昭和16）年はじめて是政橋がつけられました。今日、是政橋も関戸橋も毎日車でいっぱいですが、向山から薪を背負って帰ってくる人の姿は見られません。　（O）



インフォメーション

特別展 遠くを望む　－江戸時代の望遠鏡展－

7月21日(日)～9月1日(日)

日本に望遠鏡が伝来したのは、今からおよそ380年前、徳川家康が江戸に幕府を開いて間もない頃だといわれています。幕府は遠くの物を見ることができる望遠鏡を戦の道具として考え一般に普及することを禁じました。その後、270年に渡る泰平の世が続く中で、望遠鏡は戦の道具から学問の道具へと変わっていったのです。

今回の展示会では江戸時代初期に伝わった望遠鏡が時代の流れとともに、どのように普及していったのかをテーマに望遠鏡の代表的な製作者３名（森仁左衛門・岩橋善兵衛・国友藤兵衛）の作品を中心に展示します。

あるむぜお　第15号
ａｌ ｍｕｓｅｏ　イタリア語
“博物館で”“博物館にて”の意
発行年月日　平成３年３月24日
発　　行　府中市郷土の森
〒183 東京都府中市南町6-32
☎0423-68-7921